

## 古代国家形成期における日韓交流史の考古学的再構築—相互交流の視点を重視して—

研究代表者 大阪大学文学研究科 教授 福永伸哉

### 1 研究の目的と方法

3世紀半ばから6世紀末にいたる約350年の間に、日本列島の広い範囲で、5200基を超える前方後円墳が築造された。日本考古学において古墳時代と呼ばれるこの時代には、東北部から九州南部までの首長墓が、墳丘形態、埋葬施設構造、副葬品、埴輪といった諸要素において、地域をこえた共通性を有していたことが、近年の発掘調査の進展によって一層明確になっている。そうした現象の背景に、前代までにはなかった広範囲の倭人社会の政治統合が生まれたことを読みとるのは、さほど難しいことではない。

しかしその統合は、地域勢力が対等の関係で結びついたものではなかった。前方後円墳の規模は奈良県、大阪府など畿内のものが一貫して最大であったし、副葬品として用いられた銅鏡、甲冑などの貴重品については、舶載品の場合はその入手を、列島製の場合はその生産を畿内の有力集団がかなりの程度コントロールしていたことが、分布論や型式学の研究から明らかにされている。

このように、古墳時代にはじめて生まれた中央権力を支えたものが、畿内という範囲の有力集団であったことは大枠としては相違ない。ただ、その畿内の内部に分け入ってあらたな発掘調査成果を検討してみると、政権中枢は混乱と安定の繰り返しであったことがうかがえるようになってきた。そして、その倭の政治変動は東アジア情勢、とりわけ中国や朝鮮半島の地域関係と深く関わっているのではないかと、というのが本研究の着目点である。

日本の古墳時代研究においてこうした見方が可能になってきたのは、ここ約20年の間に発掘調査が急速に進み、3世紀～6世紀の国家形成期の考古資料から数多くの新たな事実がわかってきたことによるところが大きい。それとともに、近年韓国各地において日本の古墳時代に併行する三国時代の遺跡調査が急速に進み、倭との交流を示す資料が急増したことも、古墳時代研究にいつそうの国際的視点が求められる背景となっている。

本研究は、そうした新出資料をふまえながら、日本列島の古墳時代と朝鮮半島の三国時代の社会が相互交流を行うことによって急速な政治的求心性を生んだ過程を、実証的に提示することを目的としている。中心的な作業としては、古墳出土の重要な舶載製品の系統や分布状況を整理分析し、それらを古墳築造の地域的盛衰や朝鮮半島諸地域との交流の疎密などの情報と組み合わせることにより、古墳時代の変革期と対外交渉の変革期との対応関係を検討した。さらに、近年になって存在が明らかになった韓国の「前方後円墳」については、古墳時代の日韓交流史解明にとって注目すべき最新資料であり、その現地踏査、資料調査を行った上で、列島の古墳時代史と関連づけた歴史的意義を提起した。

### 2 王陵の移動現象と「政権交替論」

**王陵の移動現象とその原因** 古墳時代 350年間を通じて、王陵と目される巨大前方後円墳

はつねに畿内地域に築造された。しかし、古墳の築造時期についてのくわしい考古学研究が進んでくると、巨大前方後円墳の築造場所が大きく変動する時期のあることが明らかになってきた。すなわち、古墳時代前期(3世紀中頃から4世紀後半)には大和盆地東南部、つづく中期(4世紀末から5世紀末)になると生駒山地を越えて河内平野に移り、後期初め(六世紀初)には一時的に淀川右岸に巨大前方後円墳が登場するのである。

いますこし具体的に述べると、まず、前期に長さ 200~300m 台の巨大前方後円墳をつぎつぎと生み出した大和盆地東南部では4世紀後葉になると規模、築造数ともに急減し、これと入れ替わるように4世紀末には河内平野に古市・百舌鳥古墳群と呼ばれる 200~400m 台の前方後円墳群が登場してくることが第1の変化である。第2の変化は、5世紀末を境に、河内平野の巨大古墳の築造が下火となり、6世紀初めには同時期で列島最大の前方後円墳がはじめて淀川流域に築かれる現象である。つまり、古墳時代史は、4世紀末と5世紀末の2つの画期を挟んだ3局面(すなわち前期、中期、後期)としてとらえることができるのである。

こうした巨大前方後円墳の盛衰と移動現象をどう理解するかという点は、考古学界でも大きな議論となっていて、論者によって2つのことなる解釈が提起されてきた。

1つは、日本書紀における宮の伝承地が大和盆地に多いことを重視して、政権の中枢は一貫して大和盆地内にあったが、政権の勢いを国内外に誇示するために、王陵だけは海上や幹線河川からも見えやすい大阪湾岸地域に移したという解釈。もう1つは、そもそも古墳は被葬者の本拠地につくられるものだから、巨大な王陵古墳の場所が移動する現象は、畿内政権内部における政治的主導権の移動を反映しているとみる「政権交替論」である。

**地方の政治変動** 筆者は、4世紀末と5世紀末の二度の変化期においては、畿内の巨大前方後円墳の築造場所が大きく変化するだけでなく、これと符合するように、各地の有力古墳の築造場所が移動する事例が多く認められることが重要であると考えている。

たとえば、京都府南部の乙訓流域では、有力前方後円墳の築造場所が4世紀末を境に東部の向日市域から西部の長岡京市域に移り、6世紀にはふたたび向日市域の古墳が優勢になるといった現象が確認されている(都出 1988)。

また、大阪と兵庫の府県境を流れる猪名川の流域でも、近年大阪大学と川西市、宝塚市が共同で古墳の調査を精力的に続けており、地域内の政治変動の様子がかなり具体的にとらえられるようになってきた。すなわち、4世紀に流域内の各小地域に有力古墳が割拠していた状況が4世紀末を境に一変し、5世紀になると猪名川西岸の桜塚古墳群だけが有力古墳を継続的に築き、いわば一人勝ちの状況となる。その桜塚古墳群は5世紀末には急速に勢いを失い、これと交替するように、約100年間にわたって有力古墳の築造が認められなかった猪名川東岸の長尾山丘陵に6世紀初頭に勝福寺古墳が突如現れるのである(福永 2004)。

4世紀末と5世紀末に地域内の盟主的勢力が交替するような現象は、前方後円墳分布域の複数の地域で認められる。畿内中央の巨大前方後円墳群の移動現象と連動した古墳時代政治史の大きな転換点を示唆している可能性が極めて高いのである。

以下の章では、この二つの変化期で分けられた古墳時代前期、中期、後期の有力古墳に

副葬された代表的な大陸系文物の系統を整理分析することによって、古墳時代史の変転の背後に大陸交渉の推移を読みとるといふ、今回の助成研究で特に力を入れた作業の成果を述べてみよう。

### 3 有力古墳に副葬された大陸系文物の系統

#### (1) 前期古墳と中国華北王朝

日本列島の広い範囲で、共通の形をした有力者の墳墓である前方後円墳が突然に登場し、かつ大和盆地のものが最大であったことは、列島で最初の中央政権が畿内に成立し、各地の首長層との間に政治的な中心周辺関係が生まれたことを示している。1990年頃までは、前方後円墳の出現時期を西暦300年頃ととらえる理解が一般的であり、水稻農耕による農業生産力を基盤に台頭した各地の勢力が4世紀初頭に大和政権によって統一されたという、いわば国内的な発展の到達点としての評価が定着していた。

しかし、その後、発掘調査の進展によって前方後円墳の出現時期が3世紀半ばまで遡ることが確実となり、そこに副葬された三角縁神獣鏡が3世紀中葉の中国華北系のものであることが近年の考証によって明確になってくると、『魏志』倭人伝に記された魏王朝からの冊封を権威のよりどころとして、邪馬台国から最初の中央政権である初期大和政権が成立したという理解が可能になってきた。政治的統合の核となった大和勢力の背景には、中国王朝の後ろ盾が存在していたということになる。

3世紀中葉から4世紀半ば過ぎまでの前期古墳において、大陸系副葬品の代表的なものが上述した華北系の三角縁神獣鏡である。筆者は、三角縁神獣鏡を多量に持つ有力前期古墳の副葬品として発見例が増え始めた鉄製冑に注目している。それは、小札革綴冑と呼ばれる種類で、鱗様の形をした数cmの鉄板を革紐で綴じ合わせた構造である(図1-1・2)。

小札革綴冑は現在14古墳からの出土が確認されているが、このうち盗掘を免れて副葬品の大要がわかる7古墳のうち6古墳までに三角縁神獣鏡が副葬されている。しかも、1古墳としては最多の33面の三角縁神獣鏡を出土した奈良県黒塚古墳を筆頭に、京都府椿井大塚山古墳32面、兵庫県西求女塚古墳7面、福岡県石塚山古墳7面のように、三角縁神獣鏡をとりわけ多量に副葬する有力古墳に小札革綴冑が伴う傾向が強い。近年、古墳時代の甲冑の型式研究が進んできたが、それによると鱗様の小札を綴じて武具をつくる手法は、前漢代～西晋代までの中国大陸に認められることから、小札革綴冑が同時期の中国製である可能性はきわめて高いと考えられる(高橋工1995)。

古墳時代前期の有力首長墳において、三角縁神獣鏡と小札革綴冑という中国系の舶載貴重品がしばしば共伴することは重要である。前方後円墳を生み出した初期大和政権は、中国華北王朝との正式外交を通じて魏晋の権威を伴うそれら器物をなかば独占的に入手し、諸勢力に配布することによって、みずからを中心とする列島首長層の「系列化」に成功したことを示唆しているからである。古墳時代前期政権は、対中国交渉の成功によって成立したと理解できるであろう。

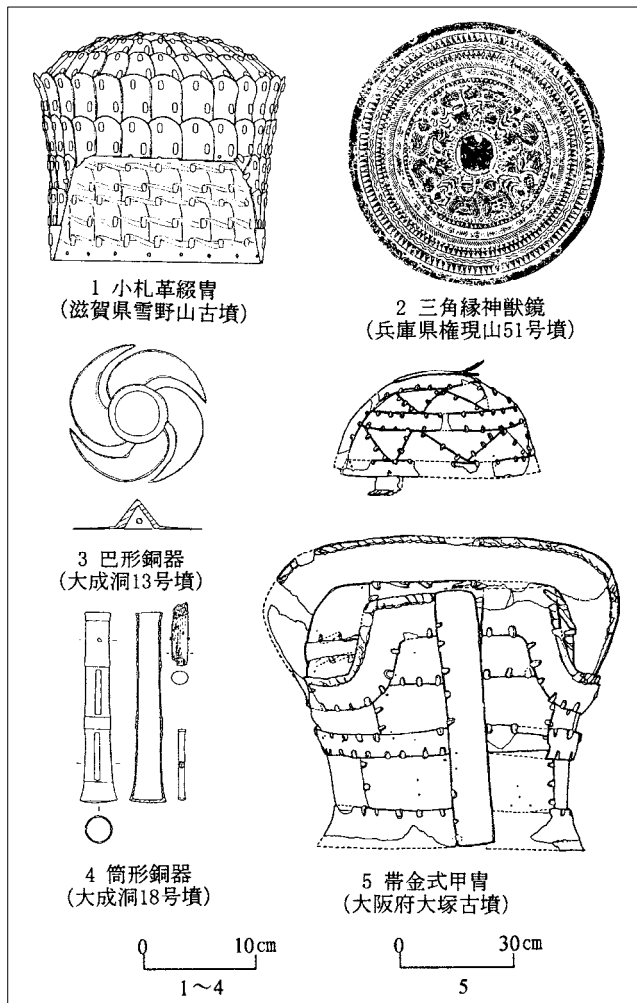


図1 古墳前・中期の副葬金属器(各報告書より)

の技法が用いられる。

帯金式の短甲は東北から九州まで400領以上が出土しているが、もっとも多く出土しているのは河内平野の古市・百舌鳥古墳群である。ここでは、大阪府堺市黒姫山古墳、藤井寺市野中古墳のように、10領以上の短甲を副葬した事例も存在している。そうした古墳が、古市・百舌鳥古墳群内の現在天皇陵として発掘調査が認められていない巨大前方後円墳の近くに存在することは示唆的である。既に指摘されているように、河内平野の巨大前方後円墳の被葬者を中心とする政治権力が、新形式の武具を賦与することを通じて、みずからの政治系列に与する地域首長を「育成」していった可能性は高いだろう(北野1969)。

興味深いのは、古墳時代中期に現れるこの帯金式短甲が、小札革綴冑や三角縁神獸鏡といった前代までの中国系副葬品と排他的な関係にあることである。小札革綴冑は14古墳から出土しているが、このうち帯金式短甲を伴出した古墳は三重県石山古墳1例のみであり、しかも、それは同一古墳内の異なる埋葬施設からの出土という関係である。

小札革綴冑から帯金式短甲への推移は、機能面で進化を遂げて武具の形が変化したということではない。前期から中期の武具の組み合わせを検討した橋本達也氏によって、小札革

## (2)中期古墳と伽耶勢力

3世紀中葉から後葉にかけて、魏晋から「倭王」としての冊封をうけ、東アジア世界において文字通り倭人の代表としての地位を確立した初期大和政権の勢いは、しかし、4世紀後葉頃には衰えを見せるようになる。初期大和政権の本拠地と目される大和盆地東南部の巨大前方後円墳の築造が続かなくなるのである。

**銅鏡から短甲へ** この頃になると三角縁神獸鏡や小札革綴冑といった中国系の舶載品は急速に影を潜めるようになり、かわって有力古墳の最上位の副葬品となったのは前代まで認められなかった鉄製の短甲である。それは「帯金式」の短甲と呼ばれるもので、細長い鉄板でまず短甲の骨組みをこしらえた後に、内側から地板という長方形や三角形の鉄板を貼って完成形態となる新しいタイプである(図1-5)。地板の固定には、はじめ革綴、後には鋳留

綴冑に伴うのは木製や革製などの列島在来の有機質の短甲であるのに対して、帯金式短甲にはおなじく帯金構造を持つ鉄製冑が組合わさることが明らかにされている(橋本 1996)。つまり、小札革綴冑と帯金式短甲では、武装の「系統」そのものが異なっていると理解すべきなのである。

また、三角縁神獸鏡との関係については、200 基以上の帯金式短甲出土古墳のうち7古墳で共存事例が認められるのみである。三角縁神獸鏡の製作時期は倣製品を含めても4世紀中葉頃までであるのに対して、帯金式短甲は4世紀後葉以降に出現するので、全体としてみれば盛行時期の差があるという事情はあろう。しかし、4世紀後葉から5世紀初頭にかけては両者の副葬が併存する時期に当たる。にもかかわらず、伝統的な三角縁神獸鏡を副葬する古墳と、最新の帯金式短甲を副葬する古墳が一致しない傾向が強いことは、それぞれの配布・入手によって結ばれた政治系列が別個のものであった可能性を強く示唆しているのである。古墳中期に政治的主導権を握っていくのは帯金式短甲に象徴される勢力ということになる。この河内平野の勢力を核とする古墳時代中期の新たな中央勢力を「河内政権」と呼称しておきたい。

**帯金式短甲の系譜** では、その帯金式短甲の系譜はどのようにとらえられるであろうか。日本列島の古墳の調査が進んでくると、帯金式短甲に先行する4世紀中葉に日本列島にはじめて鉄製短甲が出現したことを示す事例が増えてきた。それは、堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲と呼ばれるもので、細長い鉄板や方形の鉄板を革で綴じた構造を持つ。

これらは、従来、前期古墳に特徴的な「前期型短甲」ととらえられてきたが、近年の出土数の増加によって型式研究が進展すると、堅矧板革綴短甲から方形板革綴短甲を経て帯金式短甲へと一連の技術系譜で展開することが明らかになってきた(高橋克 1993)。さらに、堅矧板革綴短甲との関係がうかがえる縦長鉄板を用いて製作する短甲が4世紀の韓国釜山市福泉洞古墳群や金海市退来里遺跡などで出土し、その技術系譜の出発点を朝鮮半島東南部の伽耶地域に求められることがほぼ確実になってきた。

堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲などの前期型短甲を出土した古墳は前期中葉から後葉にかけて 20 基が知られているが、このうち三角縁神獸鏡との共伴は、やや不確実な事例を含めても7例にすぎない。これら2種の短甲を副葬する古墳は前期でもとりわけ有力な存在であり、被葬者の政治的地位という点からは三角縁神獸鏡との共伴率が小札革綴冑の場合と同様に高率であっても不思議ではないが、現実には4割弱にとどまっている。

上述のように帯金式短甲に先行する前期型短甲もまた半島南部の伽耶地域とつながりがうかがえることを重視すれば、華北王朝の権威を帯びた三角縁神獸鏡や小札革綴冑を利用した初期大和政権とは異なる新しい政治勢力が、古墳前期の枠の中で早くも4世紀中葉以降には台頭を始めたという理解を導くことができる。やがて定型化した帯金式短甲が量産が始まる4世紀後葉には河内政権として確立するこの新興勢力の、東アジアにおける連携パートナーは半島南部の伽耶勢力であった。

こうして列島の政治的主導権は、「中国華北派」から「半島伽耶派」へと移っていくことになる

のである。三角縁神獸鏡と前期型短甲の両者を入手副葬した数少ない古墳の被葬者は、政治的転換期にあつて新旧両勢力から連携の働きかけを受けた有力首長と考えればよからう。

**半島南部の倭系遺物の急増** 列島における新興勢力台頭の原動力が伽耶勢力との連携にあったことを推定できるようになったのは、1990年代以降に韓国慶尚南道地域で次々と事例が増加してきたいわゆる「倭系遺物」出土によるところが大きい。

その代表的な遺物としてあげられるのが、巴形銅器や筒形銅器などの青銅製装飾具である(図 1-3・4)。前者は革盾の飾り金具、後者は長柄の武器の柄尻の金具と考えられる。日本での分布は初期大和政権の本拠地である大和盆地東南部にはほとんど見られないのに対して、河内平野の古市・百舌鳥古墳群には一定量存在すること、4世紀後葉～5世紀の列島の有力古墳から出土する傾向が強いことから、河内平野に台頭した古墳中期の中央政権が製作し、系列有力者に配布したものととらえられてきた。

そうした遺物が伽耶勢力の盟主的首長墳墓である金海市大成洞古墳群、良洞里遺跡、釜山市福泉洞古墳群などから出土したのである。先述したように、この伽耶地域は帯金式短甲の技術系譜をたどれるという点からも、河内政権との交渉関係が推定できる地域であった。その首長墓からまさに列島で製作され、配布された巴形銅器、筒形銅器が出土したことは、伽耶地域と河内政権との交渉関係を双方の地域で出土する資料によってクロスチェックできるようになったことを意味するのである。

なお、伽耶地域の首長墓からは鉄の地金である鉄鋌が多量に出土するが、これもまた、古市古墳群中の大阪府藤井寺市野中古墳から多くの出土が知られている。伽耶との交渉のもっとも大きなメリットであった鉄素材の入手を確実にするために、河内平野を本拠とする中央政権が、倭の貴重品を贈って交渉関係を維持しようとしたことを推定できよう。

### (3)後期古墳と百済王権

**5世紀末の変化** 4世紀後葉から1世紀あまりにわたって、列島最大の前方後円墳を築き続けてきた河内平野の古市・百舌鳥古墳群では、5世紀末頃には前方後円墳築造が急速に下火になっていく。

その直前の状況を補足すると、5世紀後半には古市・百舌鳥古墳群では巨大前方後円墳の築造が続く一方で、列島のその他の地域では前方後円墳築造数が減少するとともに規模も縮小化が著しくなる。前方後円墳に替わって簡略的な帆立貝形古墳(円墳に短い突出部を付した形)が登場する地域も少なくない。こうした5世紀後半に顕著になる中央と地方の対照性については、5世紀後半(とくに雄略大王者)に政権の中央集権的な性格が強まり、地域首長の前方後円墳築造に対して規制を加えたのではないかという小野山節氏の理解が、筆者には資料の状況をもっともうまく説明しているように思われる(小野山 1970)。

そして5世紀末になると、上述のように政権中枢の巨大古墳群である古市・百舌鳥古墳群そのものがにわかに勢いを失っていく。集権化を極めたかに思えた河内政権に大きな変動が生じていたと理解せざるをえないのである。

このような急変を経て6世紀前葉には、最大規模の前方後円墳の築造される地が河内を離

れて摂津北部の淀川流域へ移動すると同時に、列島各地で前方後円墳の築造がふたたび活発になるという大きな変化が現れるのである。

**新系統の金属製品** 6世紀前葉に復活する、各地の盟主的前方後円墳の中には、装飾付大刀、金銅製馬具、銅鏡などの金属製品を副葬する事例が目立つようになる。注目すべきことは、これら3種はすでに5世紀の古墳にも認められるものの、6世紀のものはそれらとはスタイルや工人系譜が異なる新系統の製品であるという点である。

装飾付大刀としては、龍文や鳳凰文を円環状の枠内にはめ込んだ金銅製の飾りを把頭の部分に取り付けた「装飾付環頭大刀」と呼ばれるものが相当する。列島出土のうち最古型式と考えられるのは、6世紀前葉の滋賀県高島市鴨稻荷山古墳から出土した鳳凰文の環頭大刀である。繊細な表現の鳳凰文を見事に鋳出していることから大陸からの舶載品と見られるが、本例の出現をきっかけとして、これをモデルにした倭製の環頭大刀の製作が始まり、有力古墳の副葬品として定着していくようになる。

馬具は4世紀末頃に列島に流入し、5世紀後半にはf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の組合せがほぼ定まり、有力古墳の副葬品目を占めるようになっていた。そして、6世紀前葉になるとf字形鏡板付轡や剣菱形杏葉に加えて新タイプの楕円形鏡板付轡・杏葉が主要な存在となる。興味深いのは、5世紀の馬具は同じタイプでも大きさや形に統一性が認められなかったのに対して、6世紀になると平面形がぴったり重なり合うような規格度の高い馬具が増加してくるのである(田中 2004)。つまり、6世紀になって登場する馬具の中には、管理された新しい生産組織の元で製作されたものが多いことがうかがわれるのである。

そうした馬具は、古市・百舌鳥古墳群のエリアからは出土せず、さきの高島市鴨稻荷山古墳を始め、同じく6世紀前葉の大阪府茨木市南塚古墳、兵庫県尼崎市園田大塚山古墳など、畿内北部から近江地域にかけて分布する傾向が強い。これら初期の新系統の馬具の中には、鴨稻荷山例や南塚古墳例のように舶載品と見られる高い金銅技術を用いたものがあり、やがてそれをモデルにした国産の馬具が製作されるようになる点は、上述した装飾付環頭大刀とよく似たあり方である。

古墳中期の間はやや下火になっていた銅鏡の副葬は、6世紀前葉の有力古墳にふたたび増加する傾向が認められる。倭製のものが多いが、乳(文様面の小突起)によって内区を均等に分割して文様を割付ける従来の施文原則を踏襲せず、不規則な乳配置と画像鏡風の平面的な表現を特徴とする新しい図文を持っていることから、銅鏡製作にも新たな工人が参画したものと推定できる。

この新タイプの銅鏡の出発点となったのは、隅田八幡宮所蔵の癸未年人物画像鏡である。「癸未年」は503年にあてると理解が妥当で、6世紀初めの倭の工人の作と見るのが通説であるが、従来にない図文表現であることや、銘文中の「斯麻」なる人物が百濟武寧王の諱と同一であることから、筆者は百濟の工人が製作した可能性を考えている(福永 2007)。

**横穴式石室の採用と政治関係** これら最新形式の金属器を副葬する6世紀前葉の有力古墳に共通するのは、横穴式石室という新しい構造の埋葬施設を採用している点である。しかも、

その構造は6世紀の百済に系譜が求められる可能性が最も高い。

2007年に行われた大阪府高槻市今城塚古墳の発掘調査において、横穴式石室の基礎構造と考えられる大規模な石組み遺構が検出されたことは、新たな埋葬施設の情報の発信源が、この古墳にあることを示唆しており、きわめて重要である。今城塚古墳は、6世紀前葉に同時代最大の前方後円墳としては、大和盆地や河内平野を離れてはじめて淀川流域に築造された。古市・百舌鳥古墳群の衰退と入れ替わるように、突如として畿内北部に登場した今城塚古墳は、『延喜式』などの記述を参考にすれば継体大王陵である可能性が高い。すでに文献史学における多くの研究があるように、継体が「河内政権」の大王と直接的な系譜関係にならない人物であるとするなら、政治的主導権を掌中にする過程で、横穴式石室という新しい埋葬施設の導入によって、葬送儀礼を一新する戦略に出たと考えることも不可能ではあるまい。

6世紀前葉の淀川流域の首長墳の中に初期の横穴式石室の事例が顕著であることは、継体が507年に大王位に就いた後、約20年間にわたってこの地域に宮を築いたことと無関係ではない。おそらくは台頭しつつあった継体の支援勢力として淀川流域の首長層が大きな役割を果たすなかで、最新式の横穴式石室で結ばれる政治系列が生まれ、そこに、継体膝下の新たな工人の手になる金属製威信財が最優先で賜与されたという構図が描けるであろう。

その横穴式石室や金属器の技術系譜が百済地域にたどれることは、「継体政権」成立にあたって、百済王権との密接な交渉関係が台頭の原動力になったことを示唆している。6世紀前葉の百済は武寧王の治世。先述の隅田八幡宮人物画像鏡の銘文中には「斯麻が男弟王のために鏡を造って贈与した」と釈読できる箇所がある。斯麻を武寧王の諱、男弟王を継体の諱(男大迹王)と理解すれば、本鏡はまさに両王の連携を如実に示す資料となる。

**韓国所在の前方後円墳の意義** ところで、1980年代後半から韓国西南部の栄山江流域に前方後円形の墳墓が存在する可能性が指摘されはじめた。90年代には墳丘測量や発掘調査がすすみ、その存在自体は疑いない事実となってきた。筆者のように、倭と朝鮮半島との関係の推移を古墳時代史の変革期と関連づけてとらえようとするとき、韓国所在の「前方後円墳」がいかなる性格のものであるのかを検討しておくことは不可欠である。

現在13基の前方後円墳が知られているが(表1)、本研究の一環としてこれらを現地踏査して墳丘構造を観察し、出土遺物からその築造時期を検討する作業を行った。詳細についてはあらためて別稿を用意するが、ごく概括的な理解を述べておこう。

墳丘形態としては、発掘調査を経たもののなかでは霊岩チャラボン古墳→海南龍頭里古墳→咸平新徳古墳→光州明花洞古墳→月桂洞1号墳の順で前方部の開きや高さが顕著になることがうかがわれる。チャラボン古墳出土品は武器では長頸鏃や刃部無関の鉄矛などが特徴的であるが、時期の厳密な絞り込みには限界がある。坏蓋や縄蓆文壺からどのように判断できるかがポイントとなるが、これらを6世紀初めに当てる朴天秀氏の見解は注目できよう(朴2007)。2008年に発掘調査された海南龍頭里古墳は、墳丘形態は相対的に古相を呈するが、6世紀前葉に相当する倭系の須恵器(MT15型式)が出土していることを実見した。そのほかの調査された前方後円墳もほぼ6世紀前半のなかに限定できそうである。



表 1 朝鮮半島の前方後円墳一覧

| 古墳名    | 所在地      | 墳長  | 埋葬施設   | 埴輪        | おもな副葬品                          |
|--------|----------|-----|--------|-----------|---------------------------------|
| 七岩里    | 全北高敞郡七岩里 | 53m | 未発掘    | —         | 未発掘                             |
| 月溪     | 全南靈光郡月山里 | 41m | 未発掘    | —         | 未発掘                             |
| 新徳     | 全南咸平郡礼德里 | 51m | 横穴式石室  | —         | 鉄製武器・武器類、刀子、馬具<br>金銅冠、飾履、金製耳飾   |
| 鼓山     | 全南咸平郡竹岩里 | 70m | 未発掘    | ○         | 未発掘                             |
| 杓山     | 全南咸平郡馬山里 | 46m | 未発掘    | —         | 未発掘                             |
| 月城山 1号 | 全南潭陽郡古城里 | 24m | 未発掘    | —         | 未発掘                             |
| 聲月里    | 全南潭陽郡聲月里 | 38m | 未発掘    | —         | 未発掘                             |
| 月桂洞 1号 | 全南光州市    | 45m | 横穴式石室  | ○(石見型木製品) | 金製耳飾、鉄鏃、土器など                    |
| 月桂洞 2号 | 全南光州市    | 34m | 横穴式石室  | ○         | 刀子、ガラス玉、土器など                    |
| 明花洞    | 全南光州市    | 33m | 横穴式石室  | ○         | 鉄鏃、胡籙金具など                       |
| チャラボン  | 全南靈岩郡泰潤里 | 35m | 竪穴式石室? | —         | 鉄製武器類、農工具、金製耳飾、<br>ガラス玉、土器、馬骨など |
| 龍頭里    | 全南海南郡龍頭里 | 40m | 横穴式石室  | —         | ガラス玉、土器など                       |
| 長鼓峰    | 全南海南郡方山里 | 76m | 横穴式石室  | —         | 札甲片、小玉、金銅製品など                   |

したがって、朝鮮半島の前方後円墳は全体としては、倭王権内で継体大王が主導権を握った6世紀前半に築造されたと理解するのが現時点ではもっとも妥当であろう。

埋葬施設は九州系の横穴式石室を有するものが多い。被葬者像としては6世紀に九州から半島西南部に渡った有力層で、前方後円墳を築いてその倭系出自を示しつつ、直接的には半島の政治権力の傘下に入ってこの地域の政治的リーダーとなった人物を想定したい。

古墳時代全期間を通じて朝鮮半島と日本列島の間にはほぼ継続して相互交流の関係が見られる。それにもかかわらず、前方後円墳は6世紀前半というごく短期間に栄山江流域にのみ現れ、そしてまもなく消えていった。こうした特異なあり方を示す韓国の前方後円墳は、5世紀後葉の高句麗の侵攻によって敗走した後、半島西南部を基盤に国力の回復過程にあった百済王権が、一時的に倭人の力を借りて栄山江流域を治めようとしたことを示す存在ではなかろうか。継体大王と武寧王の時期であり、両者が不安定な国内状況に対して国際連携の強化によってその克服をはかったという理解を提起してみたい。

#### 4 総括—古墳時代史と三国時代史の東アジア的連動—

本研究で行った分析作業の結果、わが国の古墳時代史上の変革期において新たに登場した政権のそれぞれが、大陸の異なる勢力との交渉関係を構築することによって政治的主導権を手中にしたという理解に至った。いま一度その構図を整理すると、古墳時代前期の初期大和政権と中国華北王朝、中期の河内政権と半島東南部の伽耶勢力、後期の継体政権と半島西南部の百済王権という対応関係になる(さらに補足すれば、中期後半には中国(劉宋)と朝貢関係が復活したことにより、河内政権後半期の大王が集権的性格を増して地域支配を強

化する局面も指摘できる)。

倭の政権がこうした大陸交渉に求めたものとして、一貫して大陸の鉄資源があったことは疑いないが、それに加えて、前期段階では中国王朝の権威、中期段階では伽耶の鉄器製作技術、後期段階では百済の文武両面にわたる先進知識などが、政権の主導権維持のために効果的に利用されたと考えられる。倭の中心勢力は、各段階の大陸パートナーとの交渉関係を国内基盤の強化に利用するという、まさに「外交を内政に転化する」政治戦略を成功裏に実現させたときに、政権内の政治的主導権を確立しえたのであった。

ではなぜ倭の大陸パートナーは時期によって華北王朝、伽耶勢力、百済王権と変転していくのであろうか。この点については、華北(西晋)の滅亡は匈奴の侵入、伽耶の衰退は百済・新羅との力関係、百済の南遷は高句麗の南下という、列島内の政治力学とは次元の異なる東アジアの大きな政治的うねりによるものというほかない。そして、そうした大陸パートナーの浮沈に連動する形で倭の中央政権内の政治変動が生じ、さらに列島各地の古墳築造の状況が変化していったのである。

古墳時代史の大きな流れをこのようにとらえた時、もはや列島内の諸事情で歴史が完結する時代は終わり、倭人社会が古代の「グローバル化」の波の中に否応なく踏み出さざるをえない新時代に突入したことを強く感じるのである。このことは、中国の郡県制支配から脱却して、自らの国家形成の歩を速める三国時代朝鮮半島の諸勢力にもいえることであろう。1500年前、新しい時代の半島—列島関係を築くことに成功した勢力こそが彼我の政治的主導権を確立し、歴史に名を残すことになったと総括して、本研究の報告としたい。

本研究の機会を与えていただいた JFE21 世紀財団に対して、心から感謝の意を表します。

## 参考文献

- 小野山節 1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3 考古学研究会  
北野耕平 1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』54-4  
高橋克壽 1993「4世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館  
高橋工 1995「東アジアにおける甲冑の系統と日本—特に5世紀までの甲冑製作技術と設計思想を中心に—」『日本考古学』第2号 日本考古学協会  
田中由理 2004「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』51-2 考古学研究会  
都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22 大阪大学文学部  
朴天秀 2007『伽耶と倭—韓半島と日本列島の考古学—』講談社選書メチエ 398 講談社  
橋本達也 1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会  
福永伸哉 2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学文学研究科  
福永伸哉 2007「継体王権と韓半島の前方後円墳—勝福寺古墳築造期の時代背景をめぐって—」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科